

6. 登下校時で災害が起きたら、子供がどう動くか？

学校における防災教育では実践的な訓練や発生時に起きることを時系列的に把握して行動計画をまとめるということが行われますが、登下校の途中に災害が発生した時には子供たちが自分で判断して行動しなければなりません。そのためには、子供たちがあらゆる知識を駆使して安全な行動を起こすための能力を養い、支えるようにしなければならないことから、実戦的な経験と地域と連携した取り組みが必要となります。いまは、多くのところでも“まもり隊”といって、地域の方がサポートする場合がありますのでそのようなスタッフを含めての有効な取り組みが必要となります。

まずは、通学路を含めて地域のことを確かめるということが大切なことです。つまり、発生時に安全なところにいるのかどうかを知っておくことが重要です。これは通学路を事前に歩いて、いわゆるマイマップを作るという作業の中で、気を付けておくべきことや場所を確認するようにしておくことです。同時に、安全なところがあるかを確認しておく必要があります。つまり避難できる場所ということで、安全な公園、空き地、駐車場、立寄り所、病院、堅牢な建物などを知っておくものです。そして、通学路、避難路を安全に移動できるか、支障となるものがあるかどうかも事前に頭に入れておいて、くずれると大事故につながるブロック塀、屋根瓦、電柱、家屋の倒壊、落下物、がけ下、崩れそうな道路などの情報を周りの人と共有しておくと思いいます。通学路には災害時に危険となるものが多くあり、自分たちの目と足で確認してどう対応すればよいのかを考えておくと思役立つと思います。危険情報や危険になる情報を共有するということは、災害時に応用が利きます。自分たちの地域をよく知ること、危険なもの、災害時に危険になるものを確かめることは大事なことで、いまは防災マップを作るためのアプリが開発されていますので、それを活用して歩きながら、様々な地域情報を写真と文字で位置情報とともに記入して、お互いの情報交換をしながら話し合っていくことで、気づかなかったことなどがわかります。また、お互いの情報を重ねながら整理することで、出来合いのものを見るだけよりも、より理解が進むと思います。最終的に学区の実践型の防災マップができますし、それに様々な情報を重ねることで自分たちの地域のことがより深く知るきっかけともなります。つまり実際に作業をすることでの気づきと対応の方法をイメージすることができるのです。

このような知識や知恵の集積は、家族や地域へと広がっていった、地域も子供たちを守るという大きなコミュニティの醸成にも活かすことができますので、学校と地域との交流も極めて重要なことです。実際には、防災に取り組む重要性は学校も地域の方々も十分理解していますが、なかなかその始めるきっかけができないのではないのでしょうか。とにかく発災時に子供たちの命を守るには、子供たちができること、地域が支援できることがあります。特に、難しい言葉で言えば、子供たちが自ら課題を解決する能力は防災に限らずすべてのことで求められていますので、いかに大人がそれを支援できるのかということが大事なことで、自治会などでも一歩、躊躇なく歩みを進めていただくと良いのではないのでしょうか。